

滞 歐 雜 記 帳 (その三)

工 學 士 山 本 峰 雄⁽¹⁾

3. ライプツヒ見本市

伯林の自動車、オートバイ展覧會が華々しく幕を閉じた3月5日には、獨逸或は世界第一のライプツヒの春の見本市が開幕されて、技術者の足は伯林からライプツヒに向けられた。前日から多數の特別列車が、各地からライプツヒに向けて仕立てられ、開期中は毎日十數本の特別列車が伯林からライプツヒに向ひ、人口 715,000 人の此の都市は見本市の訪問者で溢れて居た。停車場附近の多數の大ホテルは勿論、小さなホテルやガスト・ホーフを動員しても、之等の夥しい訪問者を收容出来ないで、餘分の部屋を一つでも持つて居る民家は、至て外來者の宿舎に割當てられ、此の宿舎の世話をする案内者が設けられて居るがそれでも早目に申込まないと到底一夜の露を凌ぐ部屋は手に入らない。

まして大ホテルに宿泊してゆつくり見物する等と云ふ事は、有力な傳手でもない限り不可能である。幸にも獨逸の或る商會の手で同行三人の部屋を民家にアレンジして貰つたので5日の午前7時55分出發の急行列車でライプツヒに向ふ。車中は手提鞆を持ち、赤色の見本市入場徽章を付けた若い技術者やカウフマンらしい人達で満員である。部屋が得られず伯林あたりから通ふ人もあり、又少し氣の利いた連中は自動車道路をドライブして通つて居る。前年即ち 1938 年の見本市の開期中の商用訪問者の數は 3 萬 5 千人と云はれて

(1) 航空研究所

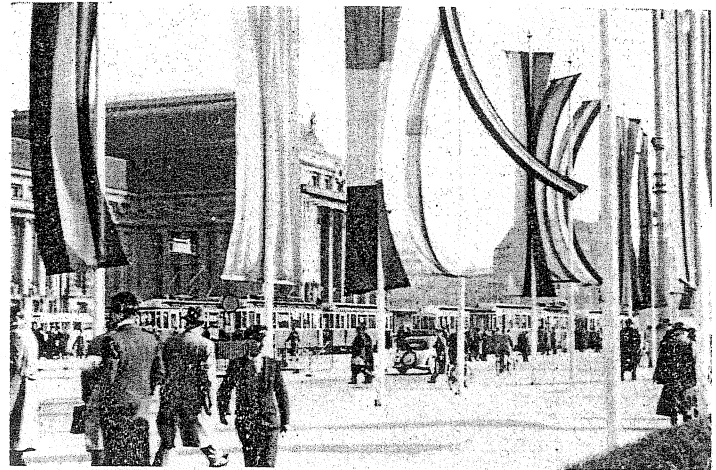
居るから、見本市の期間中ライプツヒの人口増加は大變なものである。2時間の後ライプツヒの停車場に着いて獨逸人に迎へられて宿舎に入る。我々の宿舎は郊外の新住宅地メルヘンウィーゼの瀟洒な小住宅でさゝやかな芝生と花園とに囲まれて居た。コンクリート道路を距て、數千坪の廣場を控へて向側にも同じ様な赤屋根の小住宅が建並んで居る。宿の主人は印刷出版で有名なライプツヒに相應しく印刷會社に勤める老人で、主婦は獨逸の典型的な女性で優しくてよく氣がつく人柄で先づ安心した。ライプツヒ迄來ると一軒建の住宅には、矢張りセントラル・ヒーティング等と云ふ氣が利いたものは無く高さは一間許りの陶製のストーブが部屋に置いてある。風呂場は矢張り薪でわかす舊式のものであるが、バスタブは清潔であつた。部屋は南側の日當りがよい位置を占めて塵一つなく清掃されて居て、煙草の灰が落ちるのが氣になる位である。然し壁間には油繪の額と陶器の皿が飾られ、卓には花が生けてあり、書棚の上には獨逸名物の陶器の人形が飾つてあつて部屋の空氣を和かにして居る。典型的な獨逸の家庭である。

我々の宿舎はよい方であつたが中には市中のアパートのひどく暗い薄汚い一室をあてがはれて閉口して居る人もあつた。それでも訪問者が多くて宿舎が不充分であるから兎に角一室を得た事は幸福として満足しなければならないのである。

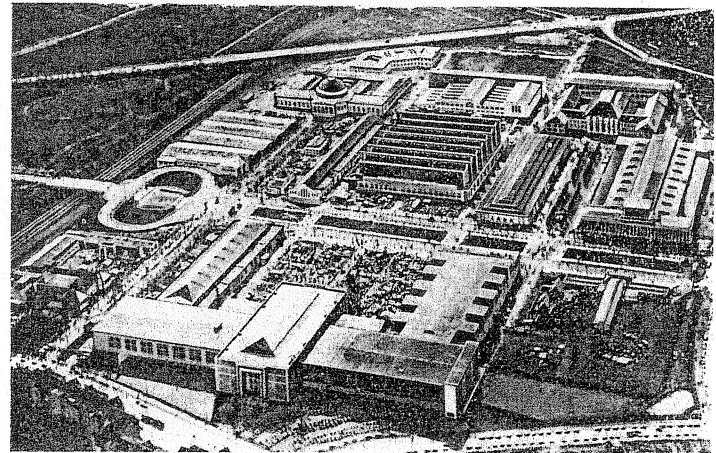
扱、獨逸では新しい工業製品を紹介し、大口取引の機會を作る所謂見本市 (die Messe) としてラ

イプツヒの外にプレスラウの見本市、ケーニヒスベルグのオストメツセ、ケルンのウエストメツセ等があり、最近ではウィーンのメツセが獨逸に加はり、總計5のメツセがある譯であるが、何と云つてもライプツヒの見本市は 700 年の歴史を持ち、其の規模の大きさも内容の充實も他の見本市の到底追隨することが出来ないものである。ライプツヒの見本市は春秋 2 回は行れるが春の見本市 (Frühjahrmesse) は特に大規模で新しい工作機械や寫眞機、或は試験機等此の春の見本市を機會に一般に紹介されるものが多い。世界各國から此のライプツヒ・メツセに集まる商用訪問者は 1938 年には 72 個國からの 3 萬 3 千人に達し、此のメツセで契約された國外輸出額は 1 億 7 千 4 百萬マークと稱されて居る。優秀な機械を作り之を輸出して外貨を獲得し、之に依つて獨逸の工業に必要な原料或は獨逸に不足する農産物、食料品を購入する事は獨逸の生活手段として正に不可欠の手段である。されば獨逸が此の種の見本市に國家として力を入れて居る事は想像の外で、ライプツヒの見本市も年々其の規模を擴大し、又其の成果を擴張して居る。

實にライプツヒと云へば見本市を思出し、見本市と云へば、直ちにライプツヒのそれを意味する程で見本市の



第 1 圖 見本市開催中のライプツヒ停車場前 (著者)



第 2 圖 工業及機械見本市會場

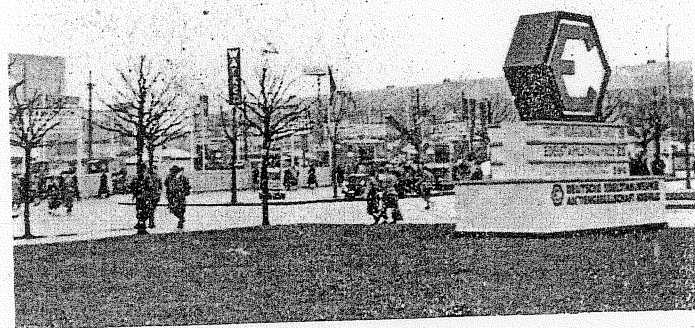


第 3 圖 工作機械館前面 (著者)

都 (Messestadt) と云はれるのも宜なる哉とうなづ



第4圖 第21ホール機械館内部



第5圖 工業及建築見本市(塔前)



第6圖 外國館(塔前)

かれる盛況である。

此の見本市には工作機械、計測器、車輛、事務用機械器具、寫真機、ミシン、材料、發動機、オートバイ、暖房、上水、通風装置、建築土木機械、家庭用機械器具、電氣機械等全ての工學部門の製品は勿論の事、玩具、衣類、食料品、運動用具、裝飾品、時計、寶石、藥品等に至る迄凡そ人生に關係する全てのものが出品される。そして機械器具、工作機械、電氣機械、建築關係機械器具、植民地用機械、發明特許等はライプツヒの南郊の常設見本市場に建てられた20個の大ホールに陳列運轉され、其他の玩具、衣類、藥品、時計、寶石等はライプツヒの停車場附近の中心地の各建築物に種類別に分散陳列される。前者は工學及建築見本市(Technische Messe und Bau-messe)と呼ばれて居る。

宿舍で少し休んで午近く電車で見本市に入場する。豫ねて約束してある第9ホール工作機械館の某會社のスタンドを訪れる爲に雨に濡れた舗道を地圖と指導標を頼りに歩いて行く。見物人の群と各館を連絡する電氣牽引車で曳かれた輕便列車の往來がしきりである。漸く第9ホールに入つて入口で案内書を求めてスタンドの位置を確めて大ホールに入る。500以上の會社から出品された大小の工作機械は何れも基礎を混凝土で固め運

轉を行つて居て宛然一棟に收められた一大工場

ある。伯林の自動車展覽會が靜的の展覽會とすれば之は正に動的展覽會である。超高速旋盤や最新式自動高速タレット旋盤等の運轉して居る間を通り此の据付運轉の費用だけでも大變なものであらうと感心しながら約束のスタンドに行く。此處で會社の重役や技師に紹介され、紀念寫真等を撮され筆者にとっては餘り詳しい事が判らないが一通り最新式の工作機械の説明を聞き、次に薄鋸工作機械の専門會社シューラーのスタンドに案内される。先づ展覽會出品物として目を驚かせたものは二重ピストン式の1千噸プレスである。ナチス黨の労働戦線で作つて居る大衆自動車の車臺の中央を前後に通る主骨の型を置いてプレス作業を實演して見せて居る。ピストンは二重になつて居て先づ外側のピストンが下りて鋸の外周を押へると次に内側のピストンが下りて主骨の深絞り工作が綺麗に出來上る。此の作業を見て居ると機械の横側に大きく浮彫りされた100 Jahreの文字が目につく。聞けば此の會社は今年で創立百年の會社であるとの事である。一體百年前にも矢張り薄鋸の工作機械を作つて居たのであるかと質問すると始めから薄鋸工作機械のみを作つて居たのであるとの事である。今更乍ら獨逸の工業の歴史と其の専門分化の古い事と機械化作業が決して近年勃興したのでは無いと云ふ事實に深く感銘したのである。更に此の會社で有名な輕合金薄鋸の工作機械を見せて貰ふ。各種の形のフランヂを起す最新式の機械の作業を見て、スタンドの一隅の椅子に腰かけて此の會社の製品の説明を聴き、始めて5ヶ月前に見た米國のエンヂニヤリング・エンド・リザーケ・コーポレーションの薄鋸工作機械が此の會社の特許を買つたものである事を知つた。此の會社は亦最近獨逸の飛行機會社で大量生産に盛んに使用されて居る、所謂 Streckzieh presse の創業者であつて、既に1929年に此の方式の機械を

作つたのである。又鋸小骨等の縁を折曲げる機械も此の會社は前から製作して居たのである。

何れにしても此の會社は近時の獨逸の飛行機的大量生産には著しい貢獻をして居る事は見逃せない事實である。

此のスタンドの見學を終つて、次に材料疲勞試験、バラシングマシン、機體振動試験装置及び一般材料試験機の製作者として有名なローゼンハウゼンのスタンドに案内される。獨逸に於て最も優秀な疲勞試験機は此の會社のものであつて、各飛行機會社の研究部や各研究所には必ず此の會社の疲勞試験機が備へつけられて居て、機體部品や構造物は勿論の事、齒車の齒や曲軸迄之等の試験機で疲勞試験が入念に行はれて居る事は後で獨逸國內の各研究機關を廻つて始めて知つたのであり又此の會社で作る材料試験機の7割が疲勞試験機で後の3割が普通の靜的材料試験機であると云ふ事を聞かされて獨逸に於ては航空の分野は勿論の事、他の工學部門に於ても今日では靜的試験は餘り重要視されて居ないで、寧ろ疲勞強度が問題の焦點である事を知つたのである。

此の二つのスタンドの見學のみで筆者は大體ライプツヒの見本市を見る收穫があつたと考へたのである。此のスタンドの見學を終り、案内の人々に別れて他のスタンドを見物する。

此處に陳列された機械は普通のありふれた機械は殆ど無くて何れも何等かの特徴を持つた新式のもの許りで大型のコッピイングマシン、厚さ1吋近い鐵鋸を任意の形にくり抜く機械等限り有る紙面ではその一つ一つを説明しつくされぬ多數の機械が陳列されて居る。そして之等は何れも多少共航空機的大量生産に關係を有するものである。

多少の興奮を覺えた第9ホールを出て寫眞館に入ると此處には獨逸の誇る高級寫眞機や小型活動寫眞攝影機を始め露出計、三脚からアルバムに至

る迄あらゆる寫眞機が陳列されてゐる。ライカの自動連続撮影用アタチメントや新鋭玉ズミタールは此の見本市に始めて發表されたものである。又色寫眞の流行と其の技術の進歩は素晴らしいものである。事務用機械のホールに入ると此處はタイプライター、自動宛名印刷機、計算機等が並べられて居る。押ばたん式の加算機、滑動印字式のタイプライター等目新しい機械に時の経つのも忘れる。ミシンのホールに入ると見渡す限り、手ミシンやミシン機械が陳列されて何れも實演をして主として婦人の足を引止て居る。電気機械館を見て表に出ると早や日も暮れかゝつて西空に有名なライプツヒの記念塔が老大な姿を浮彫にして居る宿に歸つて荷物を置いて疲れた足を運んで近所のレストランに入ると夕食の客で所狭き迄に並べられたテーブルは一杯になつて居て、何れもビールの杯を挙げ、シガラの煙にむせかへる様な盛況である。入口附近のテーブルに陣取つた若い人々と一緒になれと勧めては呉れたが椅子もない。あきらめて外に出たが此の郊外には他にレストランが無いのでタクシーで停車場附近に行くと驚いた事にはホテルの食堂は勿論の事、小さい料理屋からカフェー迄立錫の餘地が無い満員である。空しく2時間を方々歩き廻つて漸く10時過ぎに或るホテルの食堂に空席を發見して待望の夕食を攝る事が出来た。成程澤山の人が見本市に入込んで居るものだと言ふ事である。宿舎に歸つたのは既に12時を過ぎて居た。

翌日は友人も歸つて一人で防空器具や試験機、計測器、其他のホールを廻つて一日を過した方の汽車で伯林に歸つた。汽車は勿論満員であつたが二日の疲れですつかり寝込んで了つた。

此の40萬2千平方メートルの廣さを有する工業及建築見本市を詳しく見るには少く共數日を要するであらう。1938年の出品會社の總數は全見本市を通

じて9512社であると云ふ事であるから一つのスタンドを平均一分と假定しても9日間では見切れない事は明かである。

伯林に歸つて二、三日の後に再び友人の勧めで或る獨逸の工作機械會社の重役と自動車で日歸りのメッセ見物に行く機会を得た。朝8時にポツダムに集合して大型のベンツの乗用車で雨上りの自動車道路をライプツヒに向つた。筆者が待望の自動車道路をドライブした最初であつた。

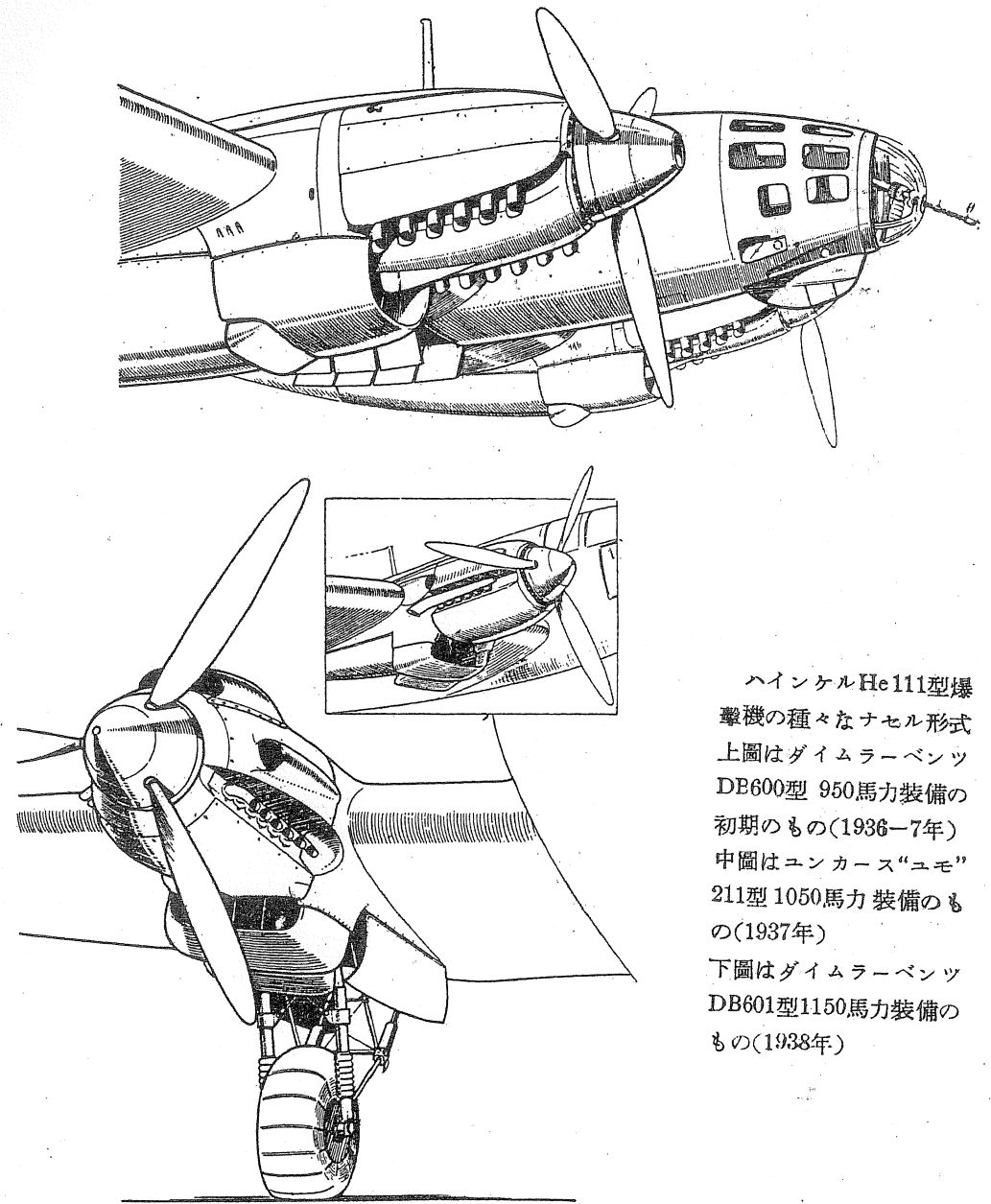
ナチス黨機械化隊(N S K K)の團員であると云ふ此の中年の獨逸人は伯林の南環状線に入ると120軒のスピードを出して同じくライプツヒに急ぐ多數の自動車を追越して居た。後方の座席に乗つた我々は生れて始めての地表速度に少しく不安を感じて居たが、自動車道路に信頼する彼は運轉し乍ら沿道の地理や自動車道路の話をして呉れた。時に高速の自動車を追越す時は140軒以上の速度を出して我々をはらはらさせた。然し途中でオープンスポーツカーが二組のスキーを幌の上に立て、悠々と我々の車を追越して小さく行つた。車上には若い男女が後方に立てたスキーと同じ位置に席を占めて頭髪を烈風になびかせ頬を赤くして居た。エルベの流れを渡りユンカース飛行機會社の試作工場の有るゲツサウの近くの自動車競走道路を走つて2時間の後には我々は見本市の彼のスタンドに着いて居た。

我々は終日彼のスタンドを根據地として前に見残した部分を見て廻り、夕方には市中の外國館を見物に行つた。其處には懐しい母國日本の部があつて漆器や絹織物や扇子が絢爛と飾られ、神社や佛閣の模型が並べてあつた。領事館の日章旗と共に忘れ難い思ひ出である。

美しい心の糧を有する我々が獨逸の物質文明に對抗する工業力を持つ様になるの。何時の事かと思ひ悩んだ事であつた。(15. 5. 13)

最近飛行機構造集 (11)

獨逸空軍の軍用機 (その四)



ハインケルHe 111型爆撃機の種々なナセル形式
上圖はダイムラーベンツDB600型 950馬力裝備の初期のもの(1936-7年)
中圖はユンカース“ユモ”211型 1050馬力裝備のもの(1937年)
下圖はダイムラーベンツDB601型 1150馬力裝備のもの(1938年)